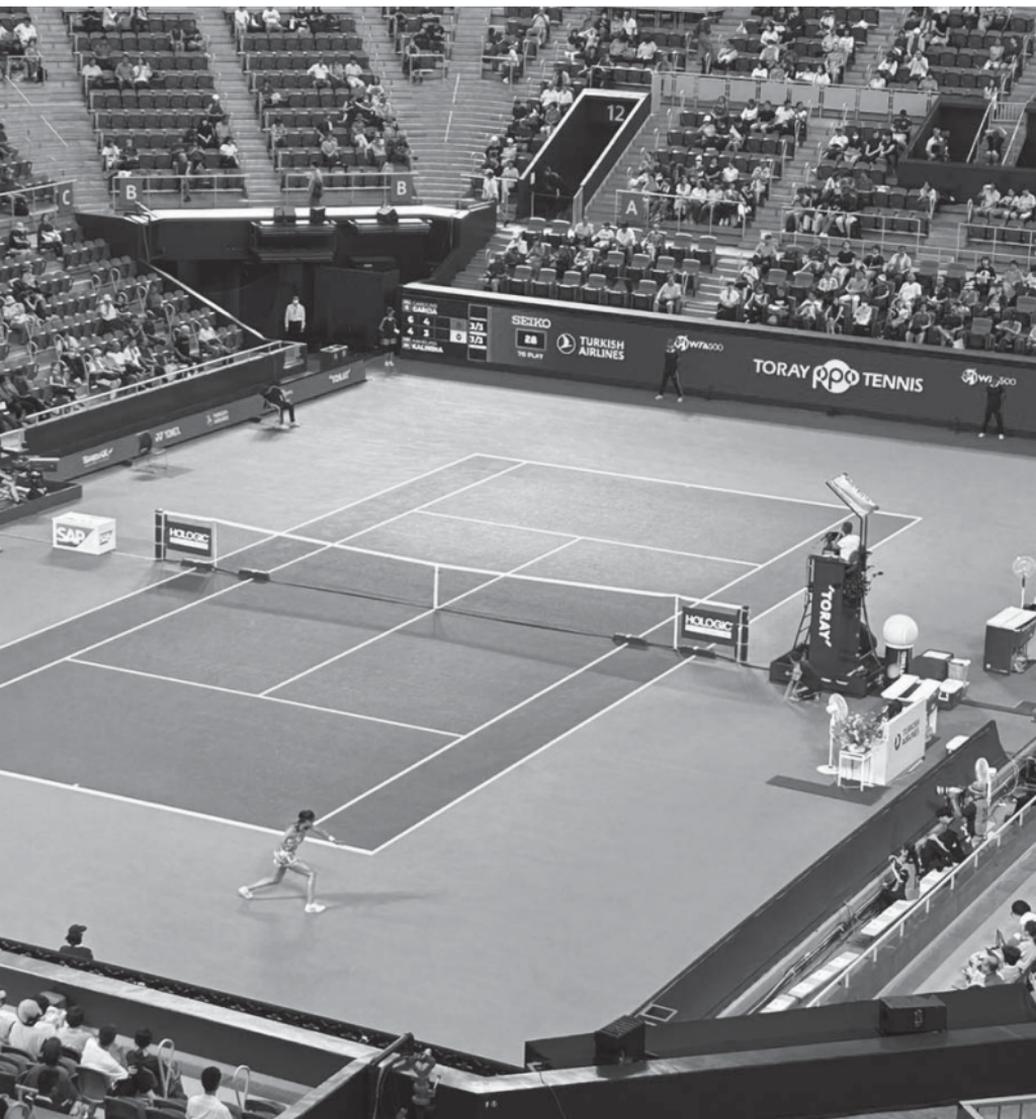


# 特

# 集

シリーズ/JLTFいまむかし その①

## 日本で初めてITF公認審判員資格を取得して 世界の舞台で活躍したJLTF会員たち





## 2001年 東レPPO大会最終日終了後 スタッフルームにて

前列左端 酒井信子さん 前列左から5人目 山本由美子さん  
中列左端 鈴木澄子さん 中列右端 飯田藍名誉会長  
中列右から2人目 鈴木斐子さん  
後列右から2人目 野地俊夫さん  
右から3人目 アラン・ミルズさん

2023年のJLTF本部機構の組織改正で、普及指導委員会の中に「審判部門」が誕生した。現在、JLTFには8人のITF公認審判員（うち1人は国際レフェリー）がいるが、いまから40年前、女子プロテニスの国際大会「東レ パン・パシフィック・オープンテニストーナメント」が日本で開催されたことをきっかけに、数名のJLTF会員がITF公認審判員資格を取得し、世界の舞台で活躍することとなった。

# 東レ パン・パシフィック・オープン テニストーナメントの歴史とともに

1984年12月、東京体育館で第1回「東レ パン・パシフィック・オープンテニストーナメント」(以下、東レPPO)が開催された。当時、日本女子テニス連盟(JLTF)の副理事長を務めていた飯田藍現名誉会長は、この時から第30回大会までディレクターを務められた野地俊夫氏に請われ、翌年に競技副委員長、87年に競技委員長、そして1991年大会からはアシスタントディレクターに就任した。以来、毎年多くのJLTF会員たちが審判や運営業務に携わり、JLTF全体で東レPPOを支えていくこととなった。

JLTFでは、同大会の初回開催時から「女子の大会は女子の手で運営しよう」という設立当初の理念を実現したいと、元全日本選手や東京と神奈川の会員が線審を担当した。だが世界のトッププレーヤーのボールを瞬時にジャッジする事は容易ではなく、翌年から全国各地で審判講習会や線審の実戦練習が行われるようになった。

同時に「JLTFでも国際大会に通用する審判の育成を」という機運が高まり、1990年に13名のJLTFの会員がITF公認審判員資格「ホワイトバッジ」を取得した。そして翌年の1991年には石黒民子、鈴木斐子、酒井信子、鈴木澄子さんら4人の当時のJLTF会員がITF公認国際審判員資格「ブロンズバッジ」<sup>(註①)</sup>を取得したのである。

この中のお二人、第9~20回(1992~2003)の東レPPOでアシスタントレフェリー、最後の2年にはチーフアンパイアとしても活躍された山本由美子さんと、第19~24回(2002~2007)で競技運営委員・委員長をされた鈴木澄子さんから、ITF公認審判員の資格取得にまつわるお話を伺った。

# ITF公認審判員資格の取得を目指して



2001年 東レPPO大会 スタッフルームにて  
左から2人目 山本由美子さん

1980年代後半から国内でも国際大会が開かれるようになり、日本テニス協会とともにJLTFも、大会運営のサポートをするようになっていった。1986年には、東レPPOの会場が神奈川県の「荇原湘南スポーツセンター」に移った。

「当時、神奈川県の支部会員だった私は、湘南スポーツセンターが会場となった時、ラインズマンとしてお手伝いを始めたんです」と鈴木さん。

東レPPOのような国際大会の主審を務めるには、国際審判員の資格が必要であったが、当時、国内の女性ではまだその資格を持っているものは誰もいなかった。「それで、頑張ってみんなで取ろうという事になったのですね。伊波昭子さんはじめ元

全日本の女子選手の皆さんがリードして、審判の練習会をして下さったことを覚えています」。

講習会や実戦での猛勉強を重ね、1990年に神戸で行われた国際審判員の試験を受験した結果、石黒民子、鈴木斐子、酒井信子、鈴木澄子、山本由美子さんら13名のJLTF会員が「ホワイトバッジ」を取得した。



国際大会で審判員を務める  
鈴木澄子さん

「当時、香港に在住していた私は、2回目の試験を受けるために、神戸に駆けつけたんですよ」と山本さん。鈴木さんも「当時、川廷榮一氏が国際テニス連盟の副会長に就任されていたし、藤倉喜代さんがJLTFの国際関連の部門で活躍なさっていて、私達はとても助けられました。その後、薦められるままにマレーシアにブロンズの試験を

受験しにいったのです」と思い出を語った。

1991年末、マレーシアのクアラルンプールで行われた国際審判員の試験では、中国人、オーストラリア人、韓国人などのアジア人30数人に混ざって数名のJLTFの会員が受験した。そして2日間に渡り、ルールに関する口頭試験や実地試験が行われ、4人のJLTF会員が「ブロンズバッジ」を取得したのである。ちなみに6人の合格者のうちの4人が日本人という快挙であった。

「国際審判員の資格を取るためには、みんなで合宿したりして猛勉強しました。JLTFの宮城黎子さんはじめ、たくさんの方々にお世話になりましたが、第10回から25回までの東レPPOにウィンブルドンからレフェリーとして来日したアラン・ミルズさんが指導して下さったことが、とても大きかったと思います」。(鈴木・山本談)

# 審判と大会運営のノウハウを学んだ 東レPPO大会

そもそもの東レPPOとJLTFの関りは、東レPPOのトーナメントディレクター・野地氏が、競技部門の運営を飯田藍現名誉会長をはじめとするJLTF会員に託したのが始まりであったという。

「そのお声がけに応えなければ、と必死に取り組みました。競技の運営も仕事内容別に組織立てをして、グループごとに責任を持って行うようにしました。ひとつひとつ几帳面に取り組めたのは、女子ならではの力だったと思います」と鈴木さん。

この時期はJLTFもちょうど47支部が出揃い、各支部でも大会の運営やルールのことなどを積極的に勉強し、会員を育てようとしていた。国際大会である東レPPOの運営に携わるようになり、大会で学んだことを各支部に持ち帰ることができたのも、良い流れだったのではないかと話す。

「東レPPOの思い出はいろいろありますが、なによりコート設営が大変でした。大会が夜中までかかってしまい、慌ててボールガールたちの宿泊場所を近くの温泉旅館に問い合わせたり、ゴルフVSヒンギスの決勝戦を、急にゴルフが欠場したこともありました」。(鈴木・山本談)

こうした苦勞をともにして来た仲間には強い絆があるというお二人。「今でも年に1度、4都県で主催して一泊旅行をしているんですよ。当時の思い出を語り合うこともあります。あの時期に国際審判員をしたことで人生経験が豊富になり、友達もふえて人生そのものが豊かになったと思っています」。(鈴木・山本談)



(註①)：ブロンズバッジと国際審判員

「ブロンズバッジ」はITF（国際テニス連盟）が公認するチェアアンパイアの資格で、ホワイト→ブロンズ→シルバー→ゴールドのレベルがある。「国際審判員」はJTA（日本テニス協会）が公認するアンパイアの資格で、現在、ITF公認の「ブロンズバッジ」以上の有資格は「国際審判員」として扱われ、任務はITFの規定に従う。1999年以降、ITFとJTAとの公認審判制度が切り離され、それぞれの審査によって資格が付与されているが、以前はこの限りではなかった。

〔飯田名誉会長にインタビュー〕

## JLTFの国際審判員の歴史

東レPPO大会の1回目を始めるときに一番苦労したのは、審判がいなかったことでした。とまかく全日本選手権に出た人達を集めてラインズマンをしてもらいました。東レPPO大会の初期の頃に最初に坂本香魚子さんが決勝の主審を務めました。その時代はまだ、国際大会の決勝の主審を日本人女性がやるとは誰も考えられない時代でした。ですが彼女は英語も堪能でしたし、テニスの実力があつたので、WTAから来ていたスーパーバイザーと現場で交渉し、そう決まったのです。

その後、東京体育館が改装工事に入り、東レPPOの会場は早稲田体育館、青山学院体育館、横浜アリーナと転々となりました。その近くの地域で審判員などを養成して大会を運営していく事になり、JLTFとのつながりができ始めました。

そもそもJLTFは全日本選手が集まって発足したのですが、当時、女性はまだ結婚すると育児などでテニスから離れざるを得ない時代でした。そこで「審判員」として国際大会で活躍する道を作りたいという意図もあったのです。

これをきっかけに、JLTFでは（特に4都県支部の）会員に、全国レディース大会の審判員養成を行っていくようにしました。この20数年間で随分とJLTFの審判員の土台ができていきましたが、その中で国際審判員になれる人は、ほんの一握り。チャンスがある人は、海外やグランドスラムに足を運んで経験を積んでいきます。

東レPPOに関して言えば、野地さんがディレクターをされた30回大会までは、大勢のJLTF会員が審判のお手伝いをしていましたよ。

## 【JLTF 国際審判員 活動の歴史】

- 1984年 第1回東レPPO開催  
\*元全日本女子選手や東京と神奈川の会員が線審等を手伝う
- 1985年 第1回普及指導委員会開催  
議題/趣旨説明・世界のテニス・大会運営と審判等  
第2回東レPPO開催 JLTFが運営協力 (以後、第30回大会まで毎年協力)
- 1986年 第2回普及指導委員会開催 (以後、毎年開催)  
議題/レイティング・トーナメント管理マニュアル・審判  
各地で主審・審判講習会を開催
- 1990年 ITF公認国際審判員資格 (ホワイトバッジ) を13人の会員が取得
- 1991年 ITF公認国際審判員資格 (ブロンズバッジ) を4人の会員が取得
- 1992年 1月 全豪オープンで初めてJLTF会員7人が線審を務める  
7月 石黒民子が日本女性としては初めてオリンピック (バルセロナ) で線審を務める  
8月 鈴木澄子が日本女性としては初めてUSオープンで主審と線審を務める
- 1993年 6月 石黒民子が日本女性としては初めてウィンブルドンで主審と線審を務める
- 1994年 3月 鈴木澄子がデ杯戦 (アジアオセアニアゾーングループ1) で日本女性としては初めて主審を務める
- 1996年 酒井信子と鈴木斐子がアトランタオリンピックで線審を務める
- 1997年 ITF公認審判員資格 (ブロンズバッジ) 保持者 JLTF会員4人  
ITF公認審判員資格 (ホワイトバッジ) 保持者 JLTF会員20人
- 2000年 10月 鈴木斐子がパラリンピック (シドニー) で主審を務める



### 2023年 東レPPO大会 JLTFピンクリボンブースにて

前列左端 飯田藍名誉会長 前列左から2人目 武正八重子会長  
前列左から3人目 山本由美子さん  
後列左から3人目 鈴木澄子さん

(取材・保坂澄子、文・善田紫紺)